

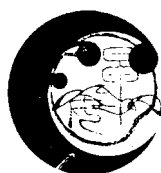
出雲の阿国

早乙女 貢

雲の阿国

早乙女 貢





出雲の阿国

昭和四十四年三月二十五日発行

定価／四六〇円

著者／早乙女 貢

発行者／角谷徳雄

発行所／浪速書房株式会社

東京都千代田区三崎町二―一二―一

電話番号／二六五―〇〇四八

振替番号／東京一二八四〇

郵便番号／一〇一

目

次

まぼろし姫

花 影

白刃の門

影なき影

桃山屏風

血と砂

蒼月の肌

白昼の血闘

菊 姫

かなし笛

夜の声

花匂う人

いばら組

血まみれ囃子

襲 撃

剣は呼ぶ

恋の拍子舞

セ

六

三

三

六

四

五

六

三

七

八

八

九

一〇

一三

一〇

一六

落花粉々

一五

恋ひとすじ

一六

花に嵐の

一七

もつれ髪

一八

逢魔の辻

一九

裸の女

二〇

はだか姫

二一

母恋い笛

二二

非情の剣

二三

濡れた夜

二四

愛情ぐるま

二五

風流踊り

二六

恋蛇皮線

二七

鬼剣の果て

二八

ねたみ小袖

二九

霜の白菊

三〇

装幀

御正

伸

出雲の阿国

まぼろし姫

1

梅花が匂っている。まるで夜を染めるかのように、濃い。

奈良の月ヶ瀬を思わせるのか、梅の里と鄙びた俗称があるくらい、そこら中、梅樹ばかりであった。

天神さまの天満宮はもとより、紅梅殿、松梅院、それから平野神社、西方寺の境内も、飛び梅が芽ぶいたように、老若大小の紅梅白梅を夜闇に浮かばせていた。

と——
その馥郁^{たぐい}たる夜気をみだして、どこやらで濁み声が聞こえた。

「——なんじゃい、鏝^{ひた}銭一貫もねいのけ？」

「そんなこといったって……」

と、かなしげな女の声が、

「勸進がうまくゆかないのですから」

天満宮門前、影向ノ松の下に人影が動いていた。

「嘔吐け、わざわざ堺から出てきて、こない目腐れ金じや、どむならんわい」

「ですから二三日待って下されば……」

「待てんからいうとるのじゃ。今夜でもおまえがその気になりさえすれば、銀の百匁や百五十匁は下さろう、というお方があるんじや。なア、お国、絹の褥に寝て半刻目をつぶるだけで銀子を……」

「いやです、そんな！」

びくっと、身をふるわして女は二三歩あと退った。

「いやだと？ やい、お国。よくも親にむかつてそんな口がきけるの」

「だって……」

「だって明後日も無え。いったいそこまで大きくなれたは誰のお蔭じゃい」

だんだん声がせりあがってくる。

「そんな大きな声を出さなくても」

「声が大きゅうて悪かったな。昼間は人目があるちゅうで夜来たら小遣もくれへんで声を出すな。やい、お国。われア親を日干しにする気か」

「この二十五日は菜種御供で人出があるんです。ですか

ら、収入も……」

「その弁解は聞き飽きたわい。こうなったら今夜はどうでも四条のお館へ行って貰おう」

荒々しく手が肩にかかった。

「いやですッ」

軽く——ふっと肩をひくと手はずれる。

「や？ この極道女が」

つんのめるのを見むきもせずに、女は身を翻えした。

軽やかな身ごなしである。

「ま、待ちやがれ。こいつ、親を、親を、ないがしろにしておって、やい、待たんけ！」

頭髮がそそけだった。仁王のように形相すさまじく追ってきた。

がっしり横に張った頑丈な体格だったが、やはり初老の齡が足を思うように走らせない。鷹の爪のような手を右へ左へはずす。

袖がひるがえり、裾が風にめくれた。ほそい脛がいたいたしまでに灰白い。

踊りできたえたからだは身軽く、栗鼠のように速い。

「うぬ！ うぬ！ お国イ勘弁しねいぞ、お国イ！」

その怒号がしだいに間遠になり、やがて聞こえなくなつた。

漸くふり切つたらしい。

お国はほっとして足をとめた。

——助かつたわ……

安心すると同時に急に力が失せた。

花の崩れるようにしなしなとその場に坐りこんでしまつた。

草むらはしとどな露に濡れていた。大分走つたとみえ、もうこのあたりには梅の香りはしない。

——どこかしら？……

疎林のはずれだった。寂莫^{せきぼく}として昏い野原は東西もわからぬ。

「——？」

お国は耳を澄ました。

どこやらで笛の音がしている。澄んだ淋しい音いろだった。そこらの丘か林の中の蓬庵からでも洩れてくるのであろうか。

笛の音は、一層夜の静寂をふかめるようであった。

まばらな星屑がうすら寒げにまたたいているだけで、

地上には一点の灯もなく浅い春の夜風が梢にささやき、草むらをわたっていた。

汗ばんだ肌が急に冷たくなってきた。

蓮台寺野か、柏野か——舟岡山でも見えればいいのだが、月の出まえの濃い闇が無情に塗りつぶしている。

——帰らなければ……

お国は立ちあがった。

十間とゆかないうちに川が見えた。ほっとした。紙屋川だ。やはり蓮台寺野にきていたのだ。

お国がぎょっとしてうずくまったのは、間近で人声を聞いたように思ったからである。

草むらを踏みわけてくる数人の足音がして、

「——何刻になるかの？」

野ぶとい男の声が聞こえた。

2

「亥の刻すぎました」

答えたのは若々しい声で、

「月の出に間もありませぬ」

と、つけくわえた。それだけで武士とわかるしつかり

した口調である。

会話はそれで終った。黙々と足音だけが近づいてきた。

七八人の一団である。

ぷーんと煙硝の臭いが鼻先を掠めた。息を殺すお国の目のまえを、ぶすぶす燃える火縄が揺れながら通りすぎた。

——野武士？……

背すじが寒くなった。

小具足こそ鎧っていなかったが、小袖や筒袖に伊賀袴の不揃いの服装。いずれも四尺はあろう陣太刀を横たえている。

鉄砲をかいこんだ男は筋金手甲に腕貫をつけているのが火縄の灰明りで見えた。

かなり近よるまで気がつかなかったのは、沈黙と革足袋のせいであらう。

洛中洛外、ちかごろ剽盜の出没がしきりであった。

関ヶ原の殘党もいたし、戦後の治安のゆるみと人心の荒廢につけこむ野盜のたぐいも尠くない。

さきごろから京町奉行を廃して所司代の統轄に入ったのも、強力な治安組織が必要とされたからにほかならな

い。

お国がこの一団を咄嗟にそうしたとぐいと見たのは、寒氣よけにしてはものものしすぎる黒い布で一様におもてを隠しているからだ。

四五間ゆきすぎたところでふっと先頭の頭巾がふりむいた。

「笛の音が……」

「む。あまり遠くない」

「柏木！」

首領と見えるその男はみじかく、命じた。

「行け！」

「は？……」

一団のなかで肩幅もせまく瘦せた若者だった。その逡巡は首領も反射的に感じていた。

「念には念をいれねばならぬ」

意味のものつ非情さよりも、使命を認識させる言葉だった。かれは顎をしゃくった。

「急げ、時間がないぞ」

「はッ」

鞭うたれたように若侍はぱっと跳躍したが、そこで一

瞬たたらを踏んで聞耳をたてるや鏢もおさえて笛のはうへ走りだした。

無頼の群にはない機敏な動作だった。

そのまま一行は紙屋川のほとりへでた。

渡し舟の舟着場でもないのに、何をしようというのか？

恐ろしさよりも疑問が先にたった。若さと好奇心がその勇気をもたらしただ。お国はそっと近寄った。

一行はのびあがるようにして川面を、暗い上流のほうを見まもっている。

間もなく柏木が駈けもどってきた。

「——殺ったか？」

「いえ、それが……」

と、あえぎながら、

「かいもく、見あたりませぬ」

「なに？」

「奇妙なのです。たしかに西のかたで聞こえていたのが近づくところでは南のほうから聞こえてくるようで。そうかと思うと、樹の上で天狗が吹いているようで……」

「ばかめが！」

首領は舌うちした。

「妖^{まじ}かしの笛か、あれが」

そのあいだも、あやしの笛の音はほろ哀しく聞こえてくるのである。

虚空をよぎる晩秋の風にも似てむせび哭くかと聞こえ
嘲^{あざわら}り嗤^{わら}うそれにも聞こえる。

「うつけ者が」

と、首領はまた吐きだすようにいった。

「大殿が地下で泣いてござるわ」

「で、ではいま一度まいって……」

と、柏木が色をなしたとき、

「舟だ」

道服^{どうふく}を羽織った男が口走った。

月がでるのであろう東山の背がぼっと明るくなり、星
かげをゆらめかしていただけの水面が、微茫のなかに一
艘の小舟のすがたを見せてきた。

「合図を！」

と、首領がいった。

鉄砲をかかえた男が火縄を緩やかにまわしはじめた。
灰が夜風に吹き払われ、小さな火が闇に円を描いた。

孤舟は急に針路を変えた。

舳^{しりぞ}に月光がくだける。真一文字にすべるようにこちら
へむかってきた。

3

孤舟には――

被衣^{かぎ}きた若い女性が、屈強の壮漢と侍女に守られて乗
っていた。

武士たちはかぶりものはそのままだったが片膝ついて
敬虔な態度になった。

「姫^{きみ}ぎみにはおつつがなき御様子、祝着に存じまする」

「将監^{しょうげん}か、出迎え御苦勞」

権高く澄んだ声であった。

――美しい！……

お国は草むらで嘆声をもらしそうになった。

赤みを帯びた二十日ばかりの大きな月が、東山の端に
でて春野の疎林と紙屋川を夢のように照らした。

羅衣^{らゐ}の被衣^{かぎ}きて嫋々^{たうたう}したその姿は、幽艶な氣品に妖美
をたたえてこの世ならぬ幻想のひとに見えた。

ちらりとめれた蒼白いほそおもてには、黒々とふかい

睫毛が印象的だった。

侍女が手まわりの品を抱えておりるのを待っていたように柏木なにがしが膝を起こした。

「船頭、今宵のことはかまえて他言無用……」

「そもそも心得ておりますとも。へえへえ、酒代せえはずんで下さりや、へえ」

「とらせる」

道服の男が革巾着の紐をゆるめた。

刹那、ぴかっと白刃が閃いた。あざやかなまでの抜き討ち——

一瞬に奔った悲鳴がぶつくりきれた。噴血が水面におちないうちに、船頭の死体はもんどりうっている。

すさまじい水しぶきがあがった。

お国の口から声もれた。

自分が斬られたかのような衝撃だった。

——いけない！

はっとなって口をおさえたが遅かった。

被衣がくるっとふりむいたのである。

「だれか、います！」

指が、まっすぐに彼女のひそむ草むらをさした。その

双眸に怒りの火が燐のように燃えるのを見た。

お国は草むらからとびだした。鳥のとびたつような素早さだった。

——斬られる！

その恐怖。

「女だ！」

首領らしからぬ狼狽の声が、

「追え、逃がすな！」

お国は走った。必死だった。

操の危機どころではない。追ってくるのは残忍非情な

兇刃だ。

黒髪がなびき、裾が夜風をはらむ。

恥ずかしさも忘れた。

「助けてえーっ」

月光のなかに黒髪が銀にひかる。

その背後から革足袋はけものの群のように襲いかか

る。

ざざざと草が哭いた。

御所車に牡丹散らしの桃山刺繍の派手小袖を、兇暴な

黒旋風が追う図は——

あたかも孔雀を襲う餓狼か猛禽のような。

救いの声も虚しく夜風に消される蓮台寺野だ。

——笛のほうへ逃げればよかった……

悔いが胸を噛んだ。

が、もはや魔手は黒髪にふれんばかりに迫っている。

原がきれた。こんもりした林は北野につづく雑木林に
ちがいない。

そのはずれに一字の堂が見えた。七本松通りの不動堂
だ。

お国はそこで追い詰められた。

追ってきたのは五人。

「——おんな！」

血刀に宙を切らせて、印導をわたすように柏木がいっ
た。

「見まじきものを見たな」

「花なら雷の身に無慈悲なようだが……」

年配の男らしかったが、角鏢の野太刀の鏢もとをつか
んで微塵も容赦のない声だった。とどめを刺すように、

「死んでもらわねばならぬ」

「早く！」

と、これは道服。

柏木がさっとまた刀をふりかぶった。とたんに冷たい
霧がお国の頬に散った。

それが、刀のみぞに残っていた船頭の血汐だと知った
とたんに、お国は悲鳴をあげて身を翻えした。

「やるな！」

血刀が背に——

狂った尖先がざつくと濡れ縁に切りこむ。

間一髪に逃れたお国は不動堂のなかに人影を見た。

堂守か？　ちがう。武士だ。

「あ、お助け下さいましッ」

喜びに声ふるわしてすがりついた。

4

埃の臭いがした。

外側も風雨にさらされて黯ずみ、朽ちかけているが、
なかさはほどではない。

正面の四尺に及ぶ不動明王の坐像がゆらゆらと立ちあ
がったように見えた。

一穂の^{いっすい}ともし火が、夜風にあおられて炎をゆらめかし

たからである。

不動明王と対座したその武士は、坐禪を組み無有の境に没したごとく身じろぎもしない。

浪人者である。刀は大小とも身からはずして左脇に置いてある。

外の騒ぎが聞こえないのか。女の手を感じないのか。

凝然と彫像のように動かない。

「おねがいです！」

お国はさげんだ。

「助けてッ、助けて下さいまし！」

だが眼は半眼に閉じられたままだ。

「おねがいです、おねがい……」

哀願が涙を含んできた。

殺戮者たちもすぐには踏みこみかねていたのである。

「その御仁」

一人が呼びかけた。

返事はない。

「——卒爾ながら」

聞こえぬのか？ ふりかえりもしない。

「これッ、そんな御仁、話がある！」

いらだってきた。

が、依然として返事はない。化石したような後姿だった。

はげしい舌うちを聞かせた者がある。

「嘲弄するか！ こやつ」

五人ともじりじりしていた。

隠形の身に悠暢な掛けあいの閑はない。

その切迫感が、柏木をもっとも刺戟したのはただに若さのせいだったろうか。

船頭を一刀に仆した快感が、刀を握った腕に残っている。血走った眼がふりかえった。

「殺るか？」

殺るぞ！ という、それは意思表示だった。

角鐐が、あ、と制止しようとしたのは動かぬ背に異様に強烈なものを——鋼の威圧を感じたからだだった。

が、逆上した若さは耳もかさず濡れ縁にとびあがっていた。

何やらおめいて、きえーっ、刃が鳴いた。

必殺の斬撃に、化石の坐像も噴血をしぶくと見えた瞬間、